

追悼

鈴木康之さんの思い出

望月 幸義

鈴木さんとの最初の出会いは、モラロジー学生研究会でした。鈴木さんの同期生は、優秀な学生が揃っていて、確か学生研究会を創ったのは、鈴木さんたちが中心となったのではないのでしょうか。理論的勉強もしっかりやっていました。当時の学生研究会の指導は、水野治太郎先生が当たっていました。

それから数年後に、私は、モラロジー研究所研究部の基礎理論研究室に奉職しましたが、五、六年後に、鈴木さんも同じ部屋に入ってこられました。当時の基礎理論研究室の室長は、水野先生で、研究部長は、大澤俊夫先生でした。

鈴木さんは、東京大学で宗教学を専攻されたから、研究部の研究でも、道徳と宗教や宗教関係のものが中心でした。言葉の意味の違いについては、厳しかったことが印象に残っています。例えば、自律と他律についてです。

鈴木さんは、大塚真三先生を中心とした随筆の会のメンバーでした。その頃、どのような作品を書いてい

たの知りませんでした。一度読んで見たいと思います。この会は、大塚先生が、亡くなるまで続きましたが、その後も、有志の人たちでやっていたようです。

また、短歌を何時頃から始めたのか、何首位作ったの知りませんが、亡くなる一年ほど前に、突然、奥様と一緒に行ったヨーロッパ旅行の時、詠んだものと言って、五、六首見せてもらったことがあります。私は、短歌はよく分らないのですが、なかなか良い作品だなと感じました。こんな才能があったのなら、もっと若い内から、しっかり伸ばせばよかったのにと悔やまれました。

同じ研究室に属していましたが、共同で作業をした事は、少なかったように思います。「宗教と道徳の資料集」と『廣池千九郎語録』の作成を数人でやりました。数年前に、鈴木さんが室長になられてから、室の研究として聖人研究を始めました。それが完成する前に、突然逝去されてしまったことは、残念なことです。何事も几帳面にやる鈴木さんとしては、さぞ心残りのことだったと思います。阿南成一先生や下程勇吉先生の研究会と一緒に参加したことも、記憶にあります。

廣池学園モラロジー事務所のお世話も長年携わっていました。最初は、聖地訪問の海外旅行で、何回か実施しました。イスラエル、ギリシア、インド、ブータンなどです。皇居奉仕のお世話もよくされています。聖地研修旅行や皇居奉仕の参加者は、非常に貴重な経験をされたことと思います。

鈴木さんは、若い頃には、マージャンを嗜み、たまには一緒に遊びました。同じ基礎理論研究室の故美和信夫先生といつも一緒でした。社交ダンスは、お得意のようで、宴会などで飲むと、踊ることもありました。

二年ほど前に胃がんが判明し、手術をしました。手術は成功したようですが、一年ほど後に、食道などに

転移していることが分り、余命を宣告されたようです。それからの人生は大変立派でした。心中は大変苦しかったでしょうが、それをおくびにも出さず、亡くなる一ヶ月ほど前までは、毎日のように研究室に来られていましたし、麗澤大学の授業も勤めておられました。痛みがあまりなかったこともありましたが、全く普段と同じ活動をしていましたから、たまに会って、事情を知らない人は、病人だとは想像できなかったでしょう。

いずれにせよ、何か悟りを開いたのではないかと思われました。この点、生前に聞いてみたかったです。が、果たせませんでした。

鈴木さんの癖ともいえるべきもので、一つ思い出すことがあります。それは原稿を仕上げるのに、締め切りぎりぎりまでやらないというか、締め切り真近にならないとエンジンがかからないというところがあつたことです。事務的なことは、きちんきちんと実にこまめにやられていたように思います。室長になられてからは、それが際立っていました。

鈴木さんは、自分の信念を貫く面がありました。このことで一つ思い出すのは、私は、周辺にがんになる人が余りにも多いので、がんの勉強を始めました。よい資料があつたので、そういう資料が必要ですかと聞いたところ、必要ないと言われました。なぜ断つたのか、正確のところは、分かりませんが、鈴木さんは、自分の考えに従って、がんと闘うという信念をもっており、他人からいろいろ言われると、迷いが出るとでも思つたのではないのでしょうか。

私の家族は、鈴木さんの御家族とは、実に親しくさせて頂き、いつも大変お世話になりました。お互いに廣池学園のアパートのD棟で一緒であつたこともあり、家内同士は、頻繁に交際させて頂きました。また、

鈴木さんの長女と私の次男、鈴木さんの次男と私の三男は、それぞれ同級生でよく遊びました。お互いにアパートから移転してからも、それほど遠くなかったたので、親しい交際は続いています。

ちょうど一年位前、鈴木さん夫婦は、十日間ほどのヨーロッパ旅行をされました。余命一年と宣告されてから半年後の海外旅行であり、奥様同伴は初めてだったこともあり、万感胸に迫る気持ちだったことでしよう。奥様にとっても、一生の思い出になったことでしよう。本当に良いことをされたなと思いました。

最近、私は、死について勉強していますが、ほぼその結論として、死は怖いものではないことが分りました。それは、臨死体験者の多くが、これまでで一番素晴らしい経験だったと話しているし、死後の世界を信じるようになったことも、共通していることを知ったからです。これは、誰も死んでみることは出来ませんが、真実は分りませんが、どっちみち想像なら、楽しい想像をした方がよいと思います。鈴木さんも天国に行っているに違いありません。

こうして書いてみると、研究のことや遊びのことなどについて、もっと胸襟を開いて語り合っておけばよかったと悔やまれます。それができなかったのは、多分年齢差（六歳）が大きいのではないのでしょうか。青年期の年齢差は、壮年期と違ってずっと大きいのでしょうか。

鈴木さん、安らかに眠り下さい。そして、ご家族や私たちを見守り下さい。

ここまで書いて、少し訂正して出すつもりでしたが、短歌のことが気になったので、鈴木さんが原稿をフイルしているものを見せてもらいました。そのファイルには、大塚先生が逝去後も続いていた随筆の会（名称は、まだんまだん）の作品が綴じられていました。私にとって、鈴木さんの随筆を読むのは初めてで

す。ざっと見て、面白く、良い作品が多いことが分ると共に、鈴木さんの考えていたことも分るような感じがしました。

がんであることが分ってからは、当然のことかも知れませんが、がんに関連する作品が多くなりました。私などが口出しするまでもなく、いろいろ学んでいることが伺えました。一例を挙げれば、「生活習慣病」というエッセイには、次の一節があります。

「医師から、詳しい説明と助言を受けた。対策は、やはり、原因となっている生活習慣の改善以外にはなかった。すなわち、「食べ過ぎ」・「飲み過ぎ」・「夜遅くなってからの飲食」を避け、「適度な運動」をすることである。これまでも気にはしていながら、実行には踏み切れなかったことばかりである。

食事、酒、運動……果たして私に生活習慣の改善が出来るだろうか？「タバコ」については、運動く、やめることが出来た。（中略）

しかし、「食事と酒と運動」については、タバコより、少し手ごわそうな感じがする。今回の「結果表」を、「神さまからの警告」と受け止めて、どこまで「生活習慣の改善」が実行できるか。」

また、興味を惹かれたのは、「ブータンの谷に吹く風」の文章です。

「アーリア系の彫りの深い顔立ちと浅黒い肌の色に異国を感じさせたインド人と、日本人そっくりの顔で丹前によく似た伝統衣装を着ているブータン人。宗教もヒンドゥー教とチベット系仏教というよう

に違うのだ。

しかし、最もショッキングだった違いは、子供達が観光客に接する態度であった。インドでは、観光地や空港などに大勢の子供達がたむろしていて、ハエが食べ物にたかるように私たちにまとわりついた。ある子はライターをしっこくせがみ、ある子は不自由な手首を見せながら「タバコ一本ちょうだい」を繰り返した。この子にとっては、タバコ一本が今日一日の生活費になるのかもしれないな、と思いつながらぬ、私は「無視して下さい」という添乗員の指示に従い通した。

それがブータンに来てみるとどうだろう。子供たちは珍しい外国人に関心は示すものの、こちらと目が会おうと恥ずかしそうにはほえむのみである。バスの窓から子供たちが見えると、こちらからか、あちらからか、期せずして手を振り合うことになる。インドでは、バスの中から子供に手を振るような雰囲気はなかった。」

短歌についても、引用させてもらいます。

病める日の 妻の看護ぞ ありがたし 健やかなる日の 旧に倍して

赤坂の 冬晴れの空 澄みわたり、そよ風わたる 御会釈の庭（皇居奉仕の時）

僧たちの 沈黙の祈り しみ込みし 食卓の木は 古びて厚し（ヨーロッパ旅行の時）

鈴木さんのことについて、幾分深く理解することができて、嬉しい気持ちになりました。そして、他人を

理解することの難しさと、無くなってから深まる関係もあるのだということが分った気になりました。
鈴木さん、本当に有難うございます。